

須坂学園構想基本方針（案）地域説明会 会議録

- 1 日 時：2025 年 7 月 7 日（月）19～21 時
- 2 対 象：第 12 ブロック
- 3 会 場：豊丘小学校 体育館
- 4 参加者：56 人
- 5 市教育委員会：
勝山教育長、中村教育次長、若林学校教育課長、安川係長、
後藤主任指導主事、北村指導主事、西原指導主事

◆参加者 ◇市教委

（１）地域の大切さと構想の進め方、統合する学校の形について

◆参加者 A

- ・ 豊丘地区は、地域住民が学校を大切にし、PTA も地域を大切にして盛り立ててきた歴史がある。「全戸 PTA」という形で、子どものいない家庭も準 PTA 会員として会費を負担していた歴史がある。
- ・ 構想の進め方について、もっと地域との意見交換会をしながら進めるべきだったと思っている。
- ・ 今後の説明会や意見交換会の開催予定について質問。

◇市教委

- ・ 現在、各地区ブロック単位での説明会を開催しているため、それ以外での地域の説明会は予定していない。ただし、PTA 等からの要望があれば改めて説明会を開催したい。

◆参加者 B

- ・ 学園構想に対し、小中一貫教育と義務教育学校をなぜ分けるのか、そのメリット・デメリットは何か。
- ・ 学園構想が「子どもたちにとってより良い学び」に繋がるか。単に数だけで学校統合を進めようとしているのではないか。
- ・ アンケートの回答者の多く（半数以上が 60 代）が、少人数の学校を経験したことがない人々であり、「自分たちが学んできた環境が一番良かった」という考えで回答しているのではないか。
- ・ 豊丘小学校が最初に須坂小学校と統合することについて、学びの環境において豊丘小学校が劣っているから須坂小学校へ行かなければならないのか。

◇市教委

- ・ 小中一貫型学校と義務教育学校の提案理由

○義務教育学校は規模が大きくなり過ぎると運営が難しくなるが、規模的に第一学園は義務教育が適していると考えたため。

○第二学園は、学校規模が大きくなりすぎるため、小中一貫型学校の方が運営しやすいと考え、二つの方式を提案した。

- ・ より良い学びについて

○現在の豊丘小学校の学びの質が劣っているわけではない。

○しかし、子どもたちが多様なことを学ぶためには、ある程度の規模、つまり子どもの人数が必要だと考えている。

- ・ アンケートについて

○回答者は 60 代以上が多いという指摘に対し、アンケートは一般の住民、保護者、児童生徒、教職員の幅広い層から回答を得ている。回答結果はホームページで公開している。

- ・ 豊丘小学校が須坂小学校と統合することについて

○豊丘小学校が劣っているということではない。

○豊丘小学校は様々な工夫をしているが、今後の児童数推移を考えると、目指す学びを提供していくには、ある程度の規模が必要であると考えた。

○須坂小学校と統合することで、20～30 人規模のクラスで学びを提供できると考え、提案している。

◆参加者 B

- ・ 人数の話であれば、須坂小学校の児童を豊丘小学校へ受け入れることも可能ではないか。

- ・ 学ぶ環境、須坂らしさを求めて学ぶのであれば、このような田舎で学ぶところがあってもよい。全ての子どもが市街地の学校で学ぶことが正しいとは限らない。

◇市教委

- ・ 須坂小学校は第二学園の計画に含まれており、現在の須坂小学校の近くに第二学園を整備する案のため、須坂小学校が豊丘小学校に行くという考え方はない。

- ・ 豊丘小学校は先々の学習環境の変化が大きくならないようにまず、須坂小に行き、その後第二学園に行くことを提案している。

(2) 通学手段と放課後の支援や環境の変化への不安について

◆参加者 C

- ・ 人数が少なくなるから統合するというのは、将来的には仕方ないと思う。

- ・ 学園構想による統合で、子どもたちの通学の交通手段を心配している。

- ・ 学年が上がると部活動等もあり、下校時間がバラバラになることや、山間部であるため、スクールバスの運行や学童保育の体制はどうなるのか。

- ・ 豊丘小学校の児童が、まず須坂小学校へ通い、その後第二学園ができた時に移るという、二度、校舎が変わることに懸念がある。

- ・小中一貫教育で1年生から9年生までが同じ学校で学ぶことに對し、低学年の子どもたちへの配慮や、教員が大勢の児童生徒を適切に管理できるか不安がある。
- ・思春期の中学生が低学年の子どもたちに優しく接することができるのか不安を感じる。

◇市教委

- ・通学のスクールバスについて

○登下校のスクールバスについては、基本方針が決定した後に具体的な運行方法を検討予定

- ・児童クラブについて

○児童クラブについては、子どもが住んでいる地域のなかに設置を検討しているが、具体的な場所は未定。

- ・二度の転校について

○児童数の減少が非常に厳しい状況にあるため、できるだけ早く統合を進める必要があると考え、まず須坂小学校に通学して、第二学園の校舎ができた際に移っていただくことを考えている。

- ・小中一貫校での異年齢交流の懸念について

○異年齢交流の懸念について、奈良県の先進校に実際に視察に行き、中学生（7～9年生）が低学年の生徒に優しく接している姿があるとお聞きしている。

○小中一貫校の視察先の教員からも、小さい児童がいることで中学生が自身の生活を見直すようになるといった効果があるとお聞きしている。

（3）自然環境のよさ・地域文化との関わり、豊丘小存続の要望について

◆参加者 C

- ・豊丘小学校の豊かな自然環境を失うのはすごくもったいない。
- ・高学年の児童は仕方ないが、低学年の子どもたちは豊丘小学校に残し、逆に須坂小学校の児童が豊丘小学校に来て学ぶことはできないか。
- ・統合した場合のグラウンドなどの施設収容能力は大丈夫か。

◇市教委

- ・低学年だけ豊丘に残すという提案について、現時点では回答できない。
- ・もし須坂小学校に移ったとしても、豊丘の素晴らしい環境での学びを地域学習等で活かしていく。
- ・豊丘小学校が須坂小学校と統合しても、須坂小学校の収容能力に問題ない。

◆参加者 D

- ・豊丘地域は、住民の寄付で学校が建てられるなど、教育的土壌が非常に豊かである。
- ・江戸時代に寺子屋が多かったこと、廃校になった旧小学校が住民の寄付で建てられたこと、子どもがいない家庭も会費を負担する全戸 PTA のような文化があった。

- ・この計画が市報で初めて知らされた。計画の作成が閉鎖的なプロセスであり、住民が内容を知る機会が少なかった。
- ・「分離型義務教育学校」の場合、校長が一人で高甫小校舎と東中校舎の両方をみることになるが、それでうまくいくのか。
- ・3月までにスケジュールを決める必要があるのか、もっと丁寧に意見交換するべきでないか。
- ・間違っているかもしれないが、総務省の公的施設の統廃合というもので、3月までに申請をすれば、補助金が出るというような話があったと思うが、それとは関係はないのか。

◇市教委

- ・校長一人での運営について
 - 分離型の義務教育学校では、校長の他に副校長や教頭を複数置くことが可能であり、先行事例では校長1名と教頭2名で運営している学校がある。今後、その体制を含めて検討していく。
- ・3月までの決定スケジュールについて
 - 子どもたちの数が減っていく状況を鑑みると、あまり時間をかけることはできないため、今年度中に基本方針を策定するスケジュールで進めている。
 - 総務省の補助金は「3月までに申請しなければ採択されない」という話は聞いていない。補助金等の期限があってやっていることではない。

◆参加者 E

- ・少子化の中で、仁礼小学校との合併の覚悟はあったが、なぜ須坂小学校なのか。仁礼、豊丘、東中の小中一貫校で良いのではないか。そこに、なぜ高甫小学校を入れようとするのか。
- ・スクールバスで通うことを考えると仁礼小学校は遠いが、東中学校の校舎を使えば、歩いて通える子も多く、負担が少ないと思う。
- ・「子どものため」と言いながら、市の都合で進められているように見える。
- ・須坂市長の長期政権による弊害として、情報隠蔽や非公開が常態化している。
- ・ふるさと納税事業の停止で財政危機になったのだから、計画をゼロから見直すべき。
- ・計画策定段階で住民の意見を聞かなかったこと、一方的な説明会で年内にまとめようとしていることに対し、保護者が諦めムードになっている。
- ・もっと丁寧な説明が必要であり、計画の全面的な見直しを要望する。

◇市教委

- ・PTA総会で十分な質疑の時間が取れなかったことを謝罪。
- ・今後も要望があれば意見交換の機会を設ける。
- ・学園構想は、まず案として提示し、それに対して意見をもらう形で進めている。

◆参加者 F

- ・自分の子どもも豊丘小学校を卒業している。

- ・豊丘小学校は 150 年前に村の人々がお金を出して作った「園里の学校」であり、地域が一体となって学校を支えてきた歴史がある。
- ・現在の計画では、東地区 3 校の繋がり（消防、農業、PTA、育成会など）が断ち切られてしまう。計画を見直していただきたい。
- ・修学旅行では豊丘小学校と仁礼小学校が交流をもつ時間を作っている。そのような「心の関係」を今後も大切にしてほしい。
- ・信濃町の成功事例については、実際にはそうでない意見も聞かれる。
- ・子どもが増える方法を考えて、豊丘小学校を存続させていただきたい。

◆参加者 A

- ・豊丘小学校を須坂小学校に統合することについては、保護者と子どもたちの意見を最優先に決めるべき。
- ・「多くの子どもがいることが正義」という考え方ではなく、それぞれの子どもに合った教育環境があり、色々な形の学校を設けるべき。
- ・画一的な統廃合ではなく、子どもたちの将来に 50 年間影響を与える可能性があるため、より柔軟な学び方が実現できるように計画を精査すべき。
- ・現在のスケジュールでの進めるのは問題がある。

◇市教委

- ・少子化が進む中で、子どもたちが将来を切り開く力をつけるためには、教育的観点からある程度の規模で学ばせることが必要と考えている。
- ・学校がなくなっても子どもたちは地域に住み続けることを踏まえ、例えば須坂小学校の子どもたちが豊丘の里山の勉強をするなど、地域を超えた学びの可能性も考えられる。
- ・「特認校制度」については、須坂市の児童生徒数では、学校間で児童を取り合う形になり、子どもたちの幸せに繋がらない。
- ・地域の学校の歴史や思いは理解しているが、現在の学校の規模と状態を維持するだけで良いのか、大きな課題を皆さんと共有しながら今後も話し合いを進めたい。

（４）学校から：学校運営の現状、複式学級と教育環境の課題について

◆参加者 G

- ・学級数の減少により、昨年度から今年度にかけて教職員が 2 名減員した。本来 3 名減だったが、市で音楽専科を 1 名雇用している。
- ・1、2 年生が 8 名となり、上高井で初の複式学級となった。
- ・職員が減っても校内の仕事（入学式、卒業式、運動会運営など）は減らず、豊丘小の教職員は通常規模の学校の 2 倍の仕事をこなしている。
- ・教職員は休暇や研修等で学校にいないこともあるため、学校にいる教職員だけで対応することもあり、非常に苦慮している。

・豊丘小学校は各学年1学級のため、経験の浅い教員が一人で授業計画を立てることも多く、同じ学年の複数の教員で相談して授業を作る機会が少ないため、子どもたちにとって最適な学びを提供できているか不安を感じることもある。

◆参加者 H

- ・自身が担当する豊丘小学校の複式学級の状況を報告。
- ・1つの教室に1年生と2年生の黒板が2つあり、行き来しながら授業をしている。
- ・担任は1人のため、授業準備に2倍の時間がかかる。
- ・2年生が1年生の面倒を見たり、1年生が2年生の姿を見て成長したりするなど、複式学級ならではの良い点もある。
- ・通常規模での担任経験と比較し、小規模校と通常模校それぞれにメリット・デメリットがある。
- ・人数が多い学級では活動の幅が広がったり、いろんな意見が聞けたりする良さがある。一方、一人ひとりに目が行き届きにくい側面があった。
- ・地域の方々と教職員がお互いの声を聴きながら、子どもたちの明るい未来のために共に学校を作っていきたい。

閉会